



# 相撲

## 執念の相撲 傷だらけで掴んだ 総合4位 少年が団体5位。個人準優勝。成年が団体3位入賞!

執筆／愛媛県相撲連盟 理事長 龍山 義弘



### ●愛顔つなぐえひめ国体 相撲競技リポート

平成29年10月6日から3日間にわたり「愛顔つなぐえひめ国体・相撲競技会」が、西予市野村町の乙亥会館で開催された。競技は少年男子と成年男子の団体戦と個人戦が行われる。団体戦は少年男子(高校生)は5人制、成年男子は3人制で競われ、大会前に申請した順番で対戦して過半数勝ったチームの勝利となる。

団体予選は、47都道府県のチームが予選3試合を戦い、勝率の高い16チームが決勝トーナメント戦に勝ち上がる。競技得点を獲得し、愛媛県の天皇杯獲得に貢献するためには決勝トーナメント1回戦で勝ってベスト8(第5位入賞)まで勝ち上がる必要がある。

大会初日の少年男子・団体予選1回戦は岩手県と対戦。先鋒、二陣、中堅と闘って1勝2敗まで追い込まれ後がなくなったが副将が勝って決着を大将戦までつないだ。大将の2年生久國(津島高校)が、ひたすら前に攻める姿勢を貫き勝利を掴み取った。この接戦となった初戦で競り勝ったことがチームに勢いをつけた。予選2回戦は苦戦が予想された強豪・熊本県に4対1で圧勝。予選3回戦も茨城県を4対1で下し、3戦全勝で愛媛県は予選を通過して決勝トーナメントに進出。決勝トーナメント1回戦の岐阜県には3対2で勝利。5位以上に入賞することが確定した。準々決勝は予選で勝った強豪・熊本県との再戦となった。予選での対戦とは逆に4対1で破れたが、少年は3年連続の国体入賞となる第5位入賞。

団体戦の後に行われた個人戦では、地元野村高校3年生の住木巖太が、会場に詰めかけた満員の観衆の声援を背に受けて決勝まで勝ち上がった。決勝戦の相手は、昭和の大横綱・大鵬の孫にあたる納谷幸之介選手との対戦。全国個人優勝など実績豊富な納谷選手に対して大健闘するも破れたが、住木は地元開催の国体で個人準優勝という立派な成績を収めた。

一方、成年男子・団体戦は、昨年の岩手国体・総合優勝の立役者、中堅・和宇慶が大会1ヶ月前に出場した四国大会で膝前十字靭帯断裂の大怪我。4番手となる予備登録の田中(中央大学)も大学での稽古中に肩を怪我。本番直前にまさかのアクシデントが相次いだ。中堅・和宇慶の代わりは5番手の地元・野村町出身の原井川恵人に託すことになった。

成年男子の予選1回戦は沖縄を2対1で下し、2回戦は徳

島。3回戦は東京にそれぞれ3対0で完勝。予選3戦全勝で決勝トーナメントに進出することが出来た。

翌日の決勝トーナメント1回戦でも再度、沖縄県に勝って成年も入賞を確定させた。準々決勝の対戦相手は強豪・石川県。先鋒の吉本が突き出して敗れ、中堅原井川の対戦相手は2年連続実業団横綱、国体個人優勝等の実績を誇る荒木関選手。他県の役員が「原井川が勝ったら奇跡。もし、勝つようなことがあつたら一躍ヒーローですね。」と話しかけてきたが、私は奇跡が起こることを祈った。原井川は荒木関選手の強烈な立ち合いの当たりで土俵際に詰まりながらも渾身の突き落とし。土俵に腹這いになつたのは荒木関選手だった。その瞬間、満員の乙亥会館は地鳴りのような音と割れんばかりの拍手、大歓声に包まれた。1対1の大将戦は由留部が懸命の相撲で寄り切って準決勝進出を決めたが、この相撲で由留部は左肩を脱臼して腕が上がらない状態となつた。

準決勝の新潟戦。ここでも原井川が下手投げで勝利を收めるも1対2で敗退。3位決定戦では三重県に2対1で勝って、昨年に続いて団体3位に入賞した。

昨年のいわて国体では初の「総合優勝」という栄冠を獲得したが、少年団体・準優勝チームの大黒柱だった高校横綱(インターハイ個人優勝)の山口が高校卒業で抜け、成年はえひめ国体前に故障者が続出する厳しい状況の中で、地元開催なので「絶対に負けられない!」という大きなプレッシャーと闘いながら、気迫と執念で入賞(競技得点)を掴み取った愛媛県の成年と少年の監督と選手たちに心から感謝と敬意を表したい。

